

# 日常会話における発話の重なる機能

生駒 幸子\*

キーワード: 発話の重なり, ターン, 停滞, 促進, ラポート

## 要旨

本研究は、日常会話に現れる「発話の重なり」現象を取り上げ、その機能を導き出すことを目的とする。親しい女性同士の会話を資料として、その会話に現れた発話の重なりを位置と性質の観点から分類し、その後、発話の重なる機能を会話の進行と人間関係の確立という二つの観点から探究した。

会話の進行においては、発話の重なりは、マイナスに作用するものとプラスに作用するものがある。マイナスに作用し、トラブルとなる発話の重なりは、スムーズな話者交替を妨げ、情報伝達に支障をきたすことにより、会話を停滞させる。一方、プラスに作用する発話の重なりは、会話を効率的に運び、活気のあるテンポの速い会話を生み出す。さらに、会話の発展にも寄与し、会話を促進する働きをする。

人間関係の確立においては、また異なる見方ができる。発話の重なりを発話の接触として会話時のスキンシップのようにとらえれば、会話の進行においてマイナス作用であった発話の重なりでさえ、親近感、遠慮のなさ、リラックスした雰囲気の流れとなり、好意的人間関係の確立に貢献するものとなる。さらに、このような心理面へのプラス作用が、会話の進行にも影響を与え、会話の促進にもつながる。

最後に、日本語教育の見地からも私見を述べる。

## 1. はじめに

Sacks, Schegloff & Jefferson (1974: 700) は、会話に現れる当然ともいえる事実として、「ほとんどの場合、一度に話すのは一人である」「同時に二人以上が話すこともありうるが、ごく短時間である」(訳責筆者)という点を挙げている。この指摘は、私たちの一般的な常識と符号するであらう。

しかし、実際の会話を注意深く観察すると、次の例のように、二人以上が同時に話す箇所が頻繁にみられる。

\* IKOMA Sachiko: 名古屋大学大学院文学研究科日本語文化専攻(博士課程後期課程).

例1〈資料2〉(会社に来るお弁当屋さんの話)<sup>1</sup>

- 16 C いいなーえそれはいくつからとかあるん | ですか ↑ |  
 17 E | ひとつ | から  
 18 C ほんと ↑ えその・何というのかなビルの中の・ | おべんとやさん |  
 19 E | じゃない |  
 20 C ・ | どのへんにあるんですか ↑ みせは |  
 21 E ・ | うーーーーん どのへんにある | のかしら

本研究では、このような複数の会話参加者が同時に話す発話の重なり箇所を「発話の重なり」<sup>2</sup>と呼ぶ。

Sacks らは、発話の重なりを話者交替の一時的なトラブルととらえている。

しかし、実際の会話の中には、単にトラブルとして片付けられないものもある。例1は、質問一応答の連続であるが、すべての応答が質問の発話と重なっている。会話参加者Eが会話参加者Cの質問内容を予測して、Cの発話が途中にもかかわらず応答を始めたためである。この例では、発話の重なりが起こっても、情報は伝達され、会話は滞りなく進行しているため、少なくともトラブルではなく、むしろ会話を促進しているようにさえ見える。

先行研究の中にも、Sacks らの主張に異を唱え、この現象に肯定的な評価をするものもある(Hinds 1978; Tannen 1984; 吉田 1989)。

しかし、発話の重なり of 体系的な構造分析により、その機能を導き出した研究はまだない。そこで、本研究では、実際に交わされた会話を分析することにより、発話の重なり of 機能を明らかにすることを目的とする。

## 2. 分析資料と分析方法

分析資料として、親しい女性同士の2名による対面状況の雑談を録音して使用した。自然な会

<sup>1</sup> 文字化は、次のような方法で行った。

ターン(話者が話す権利を行使する会話中の単位、詳しくは本稿次頁を参照されたい)を分析単位とし、話者交替が起こる毎に改行する。ターンには通し番号を付ける。

新しいターンは、行の頭から始めるが、先のターンと重なったり、先のターンに割り込んだりした場合は、その場所から始める。また、ターンを取らない相づち等の発話は、ターンを取っている発話の途中に行われたものとして、その場所から始める。先のターンと重なった場合も相づちの場合も、同時に行われている発話の話者の記号を線で結ぶ。

会話参加者は、A~F までのアルファベットで表す。

その他、以下の記号を使用する。

| | 発話の重なり of の始まりと終わりを表す。

↑ 上昇イントネーションを表す。

・ 沈黙を表し、「・」一つを一秒以下とし、一秒増える毎に記号を増やす。

また、本稿で挙げる例の長さは、話の内容がわかる程度とする。注目する部分には、その発話の話者の記号の前に「→」を付けるか、発話の部分に下線を引くこととする。

<sup>2</sup> 「発話の重なり (overlap of utterances)」という語は、吉田(1989)による。

話を収集するために、被験者に小型のテープレコーダーを渡し、雑談の機会があった時に録音してもらおうという方法を取った。会話は三つ、合計2時間分である。被験者は、25歳から35歳までの女性で、合計6名である。

資料は、ターン(turn)を分析単位として文字化した。

メイナード(1993)は、ターン(メイナードは「発話順番」という言葉を使っている)を次のように定義しているが、本研究でもこれに従う。

「発話順番」とは会話において一人の話者が話す権利を行使するその会話中の単位で、会話の当事者によりその何らかの意味又は機能を持っていると認められたものである。しかも、ある発話が誰かの発話順番であると認めるためには、話し手と聞き手両者とも発話の順番を取る者が何かを言うことを認め、それを補う形で聞き手は聞き手の役目をひき受けなければならない。このような状況が確認される時、話し手が発話順番をとったとする(メイナード 1993: 56)。

分析は、資料から発話の重なり箇所を抽出して行った。発話の重なりは、相づちとの重なりを除いて<sup>3</sup>、合計414回みられた。

### 3. 発話の重なり分類

資料から抽出した発話の重なりは、発話の重なりが起こる位置、発話の重なりによる性質によって、次の表のように分類された。( )内の数字は、資料に現れた発話の重なりの回数を示す。

表1 発話の重なり分類

位置 性質	I 発話の頭と頭が 重なる場合	II 先行発話の末尾と 重なる場合	III 先行発話の途中で 重なる場合
① 偶発的	同時スタート(23)	オプションな言葉の 付加(37)	TRP <sup>4</sup> の誤認(31)
② 予測的	妨害目的による 同時スタート(0)	終わりの予測(110)	割り込み 1 内容予測(46) 2 自己の発話の優先(33) 3 妨害目的(0) 4 副次的ターン(119)
③ 無意識的	ターンを要求しない発話 1 相づち(一) 2 独り言(1)	ターンを要求しない発話 1 相づち(一) 2 独り言(0)	ターンを要求しない発話 1 相づち(一) 2 独り言(14)

<sup>3</sup> 相づち(無意識な発話の重なり)は、圧倒的に数が多いことから、他の意識される発話の重なり傾向が認識されにくくなるため、カウントはしない。

<sup>4</sup> ターンを構成する構成単位はさまざまであり、一語である場合も長い文である場合もあるが、その構成単位の終了部が話者が交替する可能性のある場所であり、この場所を「話者交替適切箇所(transition-relevance place: TRP)」と呼ぶ(Sacks, Schegloff & Jefferson 1974: 703)。なお、本稿では、「TRP」を用いる。

### 3-1. 発話の重なるの起こる位置

吉田(1989: 83)は、発話の重なるの起こる位置を三つに分類している。本研究でも同じ分析結果を得た。

#### I 二つの発話の頭と頭が重なる場合

話者X: \_\_\_\_\_

話者Y: \_\_\_\_\_

#### II ターンを持つ先行発話の末尾と次の発話の頭が重なる場合

話者X: \_\_\_\_\_

話者Y: \_\_\_\_\_

#### III ターンを持つ先行発話の途中で次の発話と重なる場合

話者X: \_\_\_\_\_

話者Y: \_\_\_\_\_

### 3-2. 発話の重なるの性質

発話の重なりをそれを引き起こした側からの視点で特徴づけた結果、次の三つの性質に分けられた。

#### ① 偶発的に起こる発話の重なり

発話の重なりを起こした側にとって予期せずに起こる発話の重なり

#### ② 予測的に起こる発話の重なり

発話の重なりを起こした側が重なることをある程度予測できる発話の重なり

#### ③ 無意識に起こる発話の重なり

会話参加者にあまり意識されない発話の重なり

### 3-3. 発話の重なるの分類項目

表1に示した分類に従って、発話の重なりを性質別に具体例を挙げながらみていく。

#### ① 偶発的に起こる発話の重なり

##### 同時スタート(位置 I)

これは、二人の会話参加者が同時に発話<sup>5</sup>を始めたことによって起こる発話の重なりである。

<sup>5</sup> 本研究では、「発話」を一人の会話参加者のひとまとまりの音声言語連続(笑い声は今回の分析から除く)とするが、それは、一人の会話参加者がある言語行動を行い始めてから終えるまでを指し、相づち、ポーズ等が入っても話し終えるまでは発話は続いているものとする。

例2<資料2> (会社で取っているお弁当の話)

- 9 E で御飯は・・・御飯はこのぐらいの 大きさを | うん |  
 10 C ふーん えー | ー |  
 → 11 E ... | よんひゃくにじゅうえんと | いうのはそう うん  
 → 11 C ... | おいしいですか↑ | ふーん

オプションな言葉の付加(位置 II)

これは、先行発話の終わりとなる場所に、先の話者によるオプションな言葉が付加されたことによって、次の発話と重なりが起こる場合である。オプションな言葉とは、ターンの終了後に任意に付け加えられる言葉である。

例3<資料3> (友人の結婚式の会場の話)

- 228 D 熱田神宮っていう | 所で | まーそれもさすがのに苦勞したんだって場所がわ  
 F ン | ー |  
 → 229 D かん | なくて |  
 → 230 F | あーそー | なん↑行ってすぐ隣にあるわけじゃないのー | あつたじんぐ  
 D | んーちょっと  
 F うの |  
 D ねー | 熱田神宮が広くって | それが一 | 地下鉄の出口から一番遠い所  
 F ンー | ー | ンー

TRP の誤認(位置 III)

これは、先行発話の途中にもかかわらず、もう一人の会話参加者が、先行発話が終わった又は中止されたと判断し、次の発話を始めたことによって起こる発話の重なりである。

例4<資料3> (友人の結婚式で歌を歌った時の話)

- 215 F 歌うたう時もなんか一言最初にちょっとあ | っく | わえてから | うた | わなあ  
 D | ー | | ー |  
 F かんかなー | とか | 思うからさー | 結局ーその相手の人がゆって  
 D | ねー | | そー | なんだって  
 → F くれたからよかったけど | まかせて | | せ | ンばいやか | ら |  
 → 216 D | あたしも | なんかさ | ー | | い | きなり

② 予測的に起こる発話の重なり

妨害目的の同時スタート(位置 I)

これは、相手が何か言いかけるのを制するために、何らかの発話を同時にスタートさせることによって起こる発話の重なりである。今回の資料にはみられなかった。









同時スタートによる発話の重なる場合は、二人の発話者間でターンの取り合いが起こるが、どちらかが発話を中止することによって、ターンの調整が行われる。これは、スムーズな話者交替を妨げ、情報の伝達に支障をきたすため、会話を一時停滞させる会話進行上のトラブルになると考えられる。

例 10〈資料 3〉（友人の結婚式の写真を見ながら）

- 310 D ・なんか旦那さんってほんとに結婚式の時って引き立て役だよね↑  
 F あははははーっ  
 → D んー | べつにこのこの | 旦那さんだからっていうんじゃないくっ|てー|  
 → F そー | やなーふふるす | |んー|ー  
 → 311 F ーそーやな | おと | この人はやっぱりそーやなー 付録っていうか女の人の  
 D |んー| んー

この例では、会話参加者 D は、「～引き立て役だよね↑」という発話でターンを終えるつもりだったが、F が笑っただけでターンを取らなかったことから、ターンを継続すべく再スタートをした。だが、ちょうどその時、F が発話を始めたため、同時スタートとなった。この場合、F が発話を中止することによってターンの調整が行われたが、その後、F はターン 311 を取り、情報の再提示を行っている。

TRP の誤認による発話の重なる場合は、先行発話の途中にもかかわらず発話を始め、重なりを起こした方が退くことによって、ターンの調整が行われる。そして、その後、真の TRP で再度発話を行うことによって、情報の再提示を行うことが多い。この発話の重なりも、同時スタート同様、会話を停滞させるトラブルとなると考えられる。

次の例では、TRP の誤認により発話を始め、重なりを起こした会話参加者 A が、すぐに発話を中止し、ターンを調整している。そして、その後、真の TRP を待って、ターン 161 を取り、情報の再提示を行っている。

例 11〈資料 1〉（下級生の名前が覚えられないという話）

- 160 B あと誰があたしちーっとも名前が覚えられないの・|こーんなに|名前が覚  
 → A |あのねー|  
 B えるの下手だったかなーと思っちゃった  
 → 161 A がっこ来てないからだって |ー| |んー|今金曜日しか来てないん  
 B |あ|そーか|なー|

妨害目的の同時スタートと妨害目的の割り込みによる発話の重なりは、今回の資料にはみられなかった。しかし、これは明らかに会話の進行を妨げるトラブルとなると考えられ、その後、修復が行われるか会話が破綻するかの結果となるであろう。さらに、会話参加者間に不調和を生じさせることにもなるだろう。これは、先の二つの予期せぬマイナス作用とは異なり、意図的に起

こそトラブルである。

#### 4-2. 会話を促進する発話の重なり

発話の重なりの中には、修復を必要としない重なり、つまりトラブルとはならないものがある。そして、それらは、会話の進行にマイナスどころかプラスに作用し、会話を促進する働きをしていると考えられる。

資料に現れたこのような発話の重なりは、終わりの予測、内容予測による割り込み、自己の発話の優先による割り込み、副次的ターンとしての割り込み、ターンを要求しない発話の相づちによるものであった。

終わりの予測による発話の重なる場合は、話者交替時に起こるギャップがまったく無い状態を作り、かつスムーズな話者交替を達成させる。よって、発話の重なるの無い話者交替よりもテンポの速い進行となり、会話を促進する働きをすると考えられる。

次の例では、二箇所で行われる終わりの予測による発話の重なりが起こっている。

##### 例 12〈資料 1〉（指導教官についての話）

- 197 A いー先生じゃーー | ーん |  
 → 198 B | いい | 先生だけどー | だか | らこわい・ | いろいろ | きれら  
 A | ーん | | あそーか |  
 → 199 B れるだろー | いろいろ | 投げ出されるだ | ろう |  
 A やー | | でも | さーなんかさー | やってればさー

内容予測による割り込みの結果生じる発話の重なる場合は、内容が予測でき情報が伝達された時点で次の発話を始めることにより、効率的な会話の進行が行われることとなる。その結果、会話は速いテンポで展開していくことになる。

次の例では、会話参加者 E は、ターン 18 の会話参加者 C の質問の内容が予測できたため、割り込んでその質問に答えている。

##### 例 13〈資料 2〉（会社に来ているお弁当屋さんの話）

- 16 C いいなーえそれはいくつからとかあるん | ですか ↑ |  
 17 E | ひとつ | から  
 → 18 C ほんと ↑ えその・何というのかな ビルの中の・ | おべんとやさん |  
 → 19 E | じゃない |

自己の発話の優先による割り込みの結果生じる発話の重なる場合は、その後、修復が行われる。しかし、これは、先にみた会話を停滞させる発話の重なりとは異なる働きをしている。Power & Martello (1986: 37) は、「もし話者の発話が必要でなかったり、効果的でなかったり、もっとも優先的なゴールに向いていなかったりする場合は、合理性と協力の原則が、割り込みを



## 例 15 &lt;資料 1&gt; (人と話す時の視線についての話)

- 58 B 視線—どこやっ | ていいかわか | 置き場がな | い相手と— | ・な—んにも感じ  
 → 58b A | 置き場がない | | あ— | — | —
- 59 B ない相手 | と— | — | っていうかさ— | — |  
 A | あ— | — | | ん | — | そ—だね—やっぱなんかさ—あん
- 59b A ま親しくない人なんかだったら— | け | っこう | | こま | ってるってこ  
 B | | | | う | ん | | ・困るのか | な— |
- A あるかもしれないね | あたし先生と | しゃべってる | ときっ | てさ—・ほとん  
 B | ふ | — | — | — | ん | | | 困る↑ |
- 59c A どうせんあっ自分がしゃべる時って—先生の顔見てないのね↑・あたし | いつも |  
 B | | | | | ふふ | | | | | どこむ |
- A | な | ん | にかあっち見たりこっち見たりえ—ととえ—ととなんです  
 B いてるのでもで | も | | あっはははははははははははははははは

ターンを要求しない発話との重なりのうち、相づちについては、聞き手行動の相づち自体に話し手をバックアップする働きがあり、重なりが起こっても起こらなくてもこの機能に変わりはない。ただ、重なりが起こるということは、相づちが長く、頻繁に行われているということを示し、その分相づちの機能がより強く働いていることを意味していると考えることができる。

## 4-3. 中立的な発話の重なり

オプションな言葉の付加による発話の重なりの場合は、先の話者にはターンを継続しようという意志はなく、速やかに話者交替が行われる。これは、トラブルではないが、とくにプラスに作用しているわけでもない。

ターンを要求しない発話との重なりのうち、独り言は、ターンを取る意志のない発話であるため、ターンの取り合いが起こらず、トラブルとはならない。また、とくにプラスに作用しているともいえず、中立的なものと考えられる。

## 5. 人間関係の確立における発話の重なりの機能

4. では、発話の重なりの会話の進行における機能について考察したが、ここでは、発話の重なりが会話参加者に与える心理的な影響について考える。

佐々木(1994: 253)は、対面コミュニケーションの理想は、内容表現が十分なされると同時に、態度の表現も過不足なくなされ、参加者間の好意的人間関係の確立に成功するものであるとしている。好意的人間関係の確立とは、参加者間にラポートが生じることである。ラポートとは、人

間同士の間を生じる「波長が合う、共感が持てる、信頼感が持てる、暖かさを感じ合う」といった感情であると説明されている。佐々木は、会話の中でラポートを表示し、その発生・維持・補強に影響する要素として、個人的体験への言及、笑い声とともに発話の重なりを挙げている。

本研究の資料では、相づちとの重なりを除いても、かなり高い頻度(414回/2時間)で、重なりが起こっている。そして、三つの会話のいずれも、会話が和やかな雰囲気で行われ、頻繁に起こる発話の重なりとともに、佐々木のいうラポートが全体を通して生じているという印象を受ける。このようなことから、発話の重なりを発話の接触として、会話時のスキンシップのようにとらえることができるのではないだろうか。親しい友人同士であれば、会話中に相手の肩をたたいたり、腕をついたりするが、このような行為によって相手に対する親しさ、好感が示され、暖かい好意的な感情であるラポートが発生する。発話の重なりも、発話の接触が親近感、遠慮のなさの表れとなり、同様な感情を呼び起こすものと考えられる。

また、会話の進行に対してプラスとなる発話の重なりだけでなく、マイナスとなる発話の重なりも、このような別の視点、会話参加者の心理面では、必ずしもマイナスにはならないのではないだろうか。会話中に偶然手が触れた時、「ごめん」と謝りはするが、不快感は感じず、かえって親近感を感じることもある。意図的でないトラブル(妨害目的以外)は、警戒心、緊張感のなさにも通じ、オープンな心の持ち方の表れともなり、プラス作用の発話の重なり同様、ラポートを生じさせると考える。その結果、打ち解けた雰囲気が作り出され、会話の進行にも影響し、マイナス作用の発話の重なりも、局所的ではない全体的な会話の進行においてはプラスに転じ、会話の促進につながっていく。

しかし、会話時に肩をたたくといったような行為を目上の人や初対面の相手に行えば、同じような感情は生まれず、逆に無遠慮、なれなれしさ、厚かましさと取られかねない。発話の重なりも、たとえ会話の進行上プラスに働くものであっても、会話参加者の関係によっては、ラポートを生じさせるどころか逆効果となることもある。さらに、会話の進行にも悪影響を与えるであろう。

## 6. 教育的見地からの考察

日本語による会話での発話の重なりを日本語教育の見地から考え、次の四つの点を指摘したい。

### (1) 文化的背景の差異

Hayashi (1988) は、日本語話者と米語話者では、同時発話 (simultaneous talk) や発話の重なりに対する認識が異なり、それらは、それぞれの会話において異なる機能を持つと主張している。Hayashi の研究からもわかるように、日本語を学ぶ学習者の持っている文化的背景は、さ

まざまである。そのため、言語教育においても、その差異を示す必要がある。発話の重なりが、日本語による会話では、どのような機能を持ち、会話にどのような影響を与えるかを示し、母語との違いに気付かせることは、学習者が日本語に対してのより深い理解を得るために、また知らないがために起こる問題を回避するために、重要なことであると考えられる。

### (2) 会話に普通に起こる現象

発話の重なりは、日常的な会話では、頻繁に起こる現象であるが、日本語教育では、教科書のモデル会話が示すように、まったく取り上げられていない。モデル会話が教育上シンプルな形をとるとしたら、発話の重なりに限らず、実際の会話で起こる現象を学習者に示し、モデル会話を補う必要があるのではないだろうか。具体的には、実際の会話をテープにとって学習者に聞かせ、会話に起こる現象に気付かせるといった方法が考えられる。

### (3) 会話ストラテジー

梶(1988)は、会話には、文法、語彙的知識以外に「会話のストラテジー」が必要であるとし、それをコミュニケーションを行うために必要でありながら、コミュニケーションの内容に積極的に関与しない部分であると定義している。そして、相づちの技術、ターンを取る技術、聞き返しの技術、会話をやわらかくする技術等の会話をスムーズに運ぶための技術を日本語会話ストラテジーとしてリストアップしている。

発話の重なりについても、その会話で果たす機能、プラス作用としての会話の促進機能により、会話ストラテジーの一種としてとらえることができると考える。

### (4) 会話スタイル

本研究の結果と考察から、発話の重なる多用は、親しい者同士の会話での一種の会話スタイルであると考えることができる。このような会話スタイルは、親しい者同士の会話では、プラスに働き、初対面の相手や目上の人との会話では、マイナスに働くことが多いであろう。つまり、会話の相手によって、その会話での好ましい会話スタイルというものが異なるのである。

現在の日本語教育では、親疎等の相手との関係による話し方の使い分けとして、敬体(です・ます体)、常体(だ体)の使い分け、敬語の使用等の言語形式の教育を行うにとどまっている。会話スタイルの使い分けも、状況や相手に合わせた会話の教育に加えることができるであろう。

## 7. おわりに

本研究により、親しい者同士の日常会話において、発話の重なりには、会話を促進する機能があることが明らかになった。会話の進行においては、会話を停滞させるものと促進するものがあるが、発話の重なりを発話の接触として会話時のスキンシップのようにとらえれば、会話の進行においてマイナス作用であったものでさえ、好意的人間関係の確立に貢献するものとなる。

このように、発話の重なりを会話の局所的な展開要因としてだけでなく、会話全体に関わる展開要因としてとらえれば、それが会話に及ぼす影響は大きい。私たちは、会話という社会行動によって、人間関係を作っていくことが多い。会話を円滑に運ぶことは、相手とのよい関係を結ぶことでもある。このようなことから、発話の重なりが、会話をスムーズに運ぶ会話戦略として、また、会話スタイルとして機能しているということは、発話の重なりが会話を成り立たせる一つの重要な要因となっていることを示しているのではないだろうか。

### 参 考 文 献

- 生駒幸子 (1995) 『日常的な会話における発話の重なり』, 名古屋大学修士学位論文.
- 国立国語研究所 (1987) 『日本語教育映画基礎編 総合文型表』, 日本シネセル株式会社.
- 佐々木倫子 (1994) 「会話スタイルとレポート——日英・若い女性の座談例から」, 国立国語研究所報告 107, 『研究報告集』 15, 秀英出版.
- 野村真木夫 (1993) 「日常的な会話における話題の転換と割り込みの機能——会話の参加者のかかわりかたをめぐって」, 『弘学大語文』 No. 18/19 (合併号), 弘前学院大学国語国文学会.
- 梶 弘巳 (1988) 「外国人のための日本語会話戦略とその教育」, 『日本語学』 7 卷 3 号.
- 堀口純子 (1991) 「あいづち研究の現段階と課題」, 『日本語学』 10 卷 10 号.
- メイナード, 泉子・K (1993) 『会話分析』, くろしお出版.
- 吉田智子 (1989) 「発話の重なり現象の考察——電話の会話分析」, 『日本語教育論集』 6, 国立国語研究所日本語教育センター.
- Hayashi, R. 1988. Simultaneous talk—from the perspective of floor management of English and Japanese speakers. *World Englishes*, Vol. 7 No. 3. Pergamon Press.
- Hinds, J. 1978. Conversational structure: An investigation based on Japanese interview discourse. in Hinds, J. & I. Howard (eds.), *Problems in Japanese syntax and semantics*. Kaitakusha.
- Power, R. J. D. and M. F. Dal Martello. 1986. Some criticisms of Sacks, Schegloff, and Jefferson on turn taking. *Semiotica*, 58.
- Sacks, H., E. A. Schegloff, and G. Jefferson. 1974. A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, Vol. 50 No. 4.
- Tannen, D. 1984. *Conversational style: Analyzing talk among friends*. Ablex.